

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2017年(平成29年)1月16日 月曜日

無料

第56号

毎月発行

発行 2017年(平成29年)1月16日 月曜日

当新聞創刊ものがたり 発行5年目を迎えて 創刊からの歴史を振り返る

半年間、津波と地震 と福島第一原発の映 像を見続けた

筆者は、3・11発生からの約半年間、家族が寝静まった深夜、ほぼ毎晩のように、テレビで繰り返し放映される津波と地震の映像を見続けていた。
当然、福島第一原発関連の映像も見続けた。

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、63歳、職業は経営コンサルタント、趣味は、縄文文化研究、アート鑑賞、陶芸など、注連縄倶楽部も主宰、作家活動も近く再開予定、最近ジム通いも開始



関連する解説・討論番組も極力かかさず見た。
その翌日は、早朝から長時間の運転をして仕事場に向かう毎日だったが、不思議なことに、寝不足にもかかわらず、あまり眠気を感じなかった。

この大災害の隅々に至るまで、ひとつも漏らさず、記憶に叩き込まずいられないという思いが勝つていたのであろう。
人間は、喉下過ぎればすぐに忘れる。しかしこの大災害は忘れることなどない。

とはいえ、多少記憶が薄れることはあるだろうと、出来る限り、反復して記憶に叩き込めば、かなりの長期間、鮮明な記憶が保持できると考えた。

次のステップ

半年間に亘る、反復を重ねた映像記憶の叩き込みが終了して、次は、いよいよ行動に移らねばならないと思った。

宮城県生まれである筆者であるが、さらに高校生活を最大の犠牲者を出した石巻で送ったこともあり、人一倍、3・11からの復興で何か出来ることはないかとずっと考えていた。

ボランティア活動も考えたが、筆者は当時、東京在住のサラリーマンであり、会社を長期間休む訳にも行かず、短期間のボランティアになって貢献できる部分は少ないので、もつと他に自分しかできない貢献があるはずだと考えた。

半年後に出版を決意

復興への貢献手段を考えていくプロセスのなかで第一に思ったことは、きつとこの復興はこのままではうまく行かない。しかし、どうしてもうまく行かなければならないし、まだその可能性はあるが、余程大胆な取組みと工夫と粘りが必要であると感じた。

それどころか、この未曾有の大災害から復興していくためには、東北に限らず、国全体の取組みとしても、既存の政治体制や経済体制

をも大きく組み替えなければ、復興はおろか復旧さえままならないと感じた。
しかし、当時その具体論は、自分からも、政府からも、知識層からも出さずじまっていた。

おそらくこう考えた宙ぶらりんのまま、時間だけが過ぎて行くのだらうと思った。誰かが、明確に復興の青写真を描き、それを東北だけでなく、国中にアピールしなければならぬと思った。

そうした紆余曲折の結果、最終的に絞り込んでやりたかったことは、本の執筆と出版で、自らの思いを深く広くアピールすることであった。

【東北独立】の出版

原稿を書き進めて行くうちに、この東北の太平洋沿岸部を襲った大災害から再び立ち上がるには、二重三

重のハンディキャップがあることを思い知らされた。ひとつは、当然ながら目の前の大災害によりもたらされた惨憺たる状況がある。

次は、この東北が、大震災発生前から長期間に亘ってずっと衰退し続けているということだった。

さらには、明治維新以降、新政府に楯突いたことによる報復として、東北が置かれてきた政治的・経済的状況のこともあった。

したがって、他地域より優先的かつ効果的な諸施策が実行される可能性についても大いに疑義が生じた。

これらを同時に解決することは、現実問題として、ほんとうに可能なのかと問い始めた。

その結果、出てきた答えが、まことに唐突ながら、「東北独立」であった。

東北が、道州制などをフルに活用して、徐々に独立性を強め、ゆくゆくは完全に独立し、かつ復旧だけでなく、復興も実現し、東北の持つあらゆる資源を活用して独立国となるという夢のような主張である。

言うは易く、行は難しであるが、それだけの気概を持たずに、この局面を乗り越えるのは至難の業と言えた。

行ったが芳しくなかった。もつと東北で注目してくれないのではないかと内心期待していたが、拍子抜けしたのであきらめず、次の手段を考えたい。

出版は一過性だが、新聞ならば、継続して発行することで、「主張」がより長く、深く浸透するのではないかと考えた。

そうして、2012年7月16日に当新聞を創刊した。

これまで、創刊以来足かけ五年という長期戦であった。無我夢中で発行し続けた。当初は10号も継続できないのではないかと思っていたが、取材先で逆に励まされ、また数少ない読者から、あの記事が良かったねといわれると、調子に乗って、どんどん取材に出かけ、記事を書いた。

そうして気がついたら、今月号で56号である。そして今年の6月号で満五年を迎えるが、感慨ひとおといたところである。

ここまでの新聞の歩み振り返る

新年にあたり、これまでの当新聞の歴史を振り返ってみたい。

創刊当初は、あまり被災地取材を行わなかった。他のメディアが被災地報道を活発に行っており、当新聞がその路線に追随したところで、カバー範囲の格差は最初から明らかだ。それよりも、どうすれば

復興が出来るのか、復興のためのビジョン作りはどうか、ビジョン作りのための基本思想は何なのかというポイントに比重を置いた。

他方で、これだけ多数の犠牲者を弔うことについても考え続けた。既存の宗教だけで、この精神的なピンチを乗り越えないのではなにかと感じたからだ。

歴史も遡ってみた。現代の日本は、あまりにも近視眼的だと感じたからである。東北の位置付けが大きく変化した明治維新、ずっと遡って、「もうひとつの別の国であった東北」が大和政権に完全に呑み込まれた平安初期、それでも満足できずに、縄文時代まで遡っていった。

東北の虐げられた歴史とその意味を掘り下げたら、新たな日本史が出現するかもしれないといういまは思う。

当新聞のこれから

こうして当新聞の約五年の歩み振り返ると、関心はあちこちに分散し、拡散していきようにも思える。もつと焦点を絞らなければならぬ。

また、3・11を取り巻く状況は確実に変化している。関心の度合いは、今年の三月に迎える満六年のイベント後に一挙に低下するだろう。そして被災地のこれからはこれまで以上に変わっていくだろう。そして当新聞にも影響を与えるだろう。

それに連動し、当新聞のあり方も考えてみたいと思う。従来とまったくの同一路線というわけには行かないだろう。

他方、福島相馬のその後もフォローするため現地取材にも行かねばならない。気仙沼にも、大船渡にも、石巻にも、大槌にも行かねばならない。



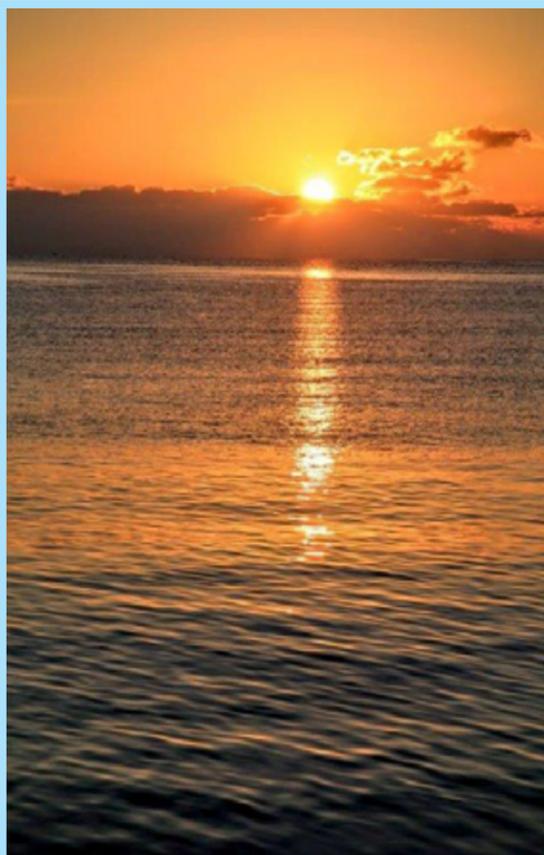
弊著：東北独立



雪の松川溪谷



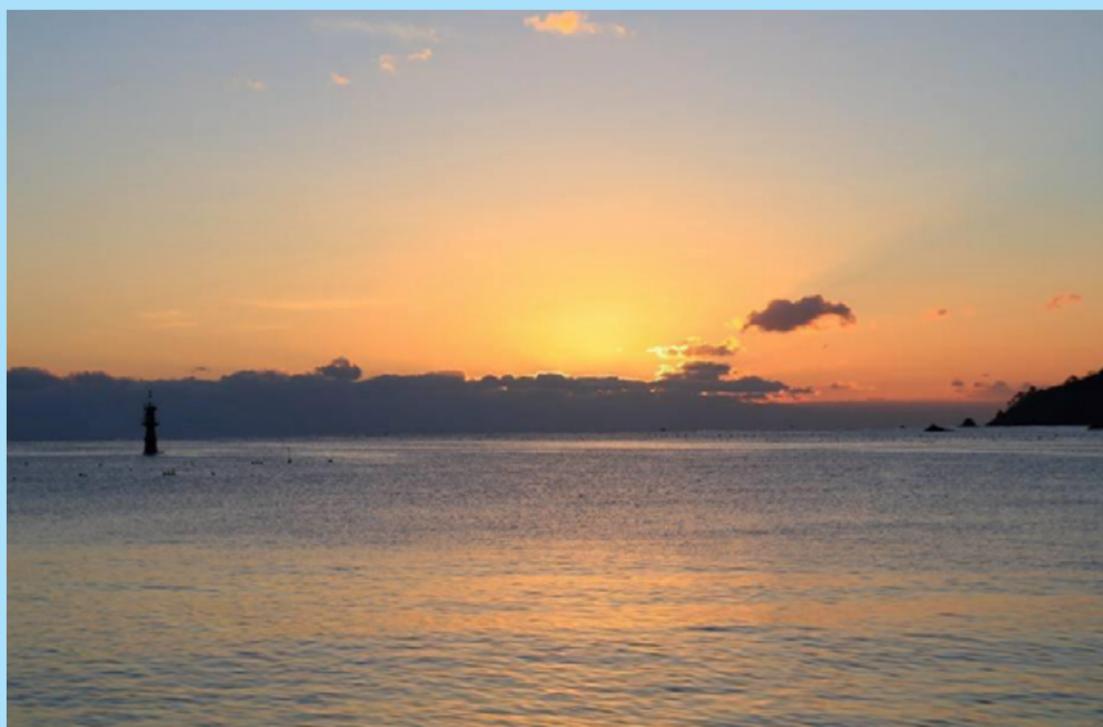
雪のカラマツ林道



両石湾の日の出

写真でお伝えする
東北の正月風景（岩手）

写真撮影：尾崎匠



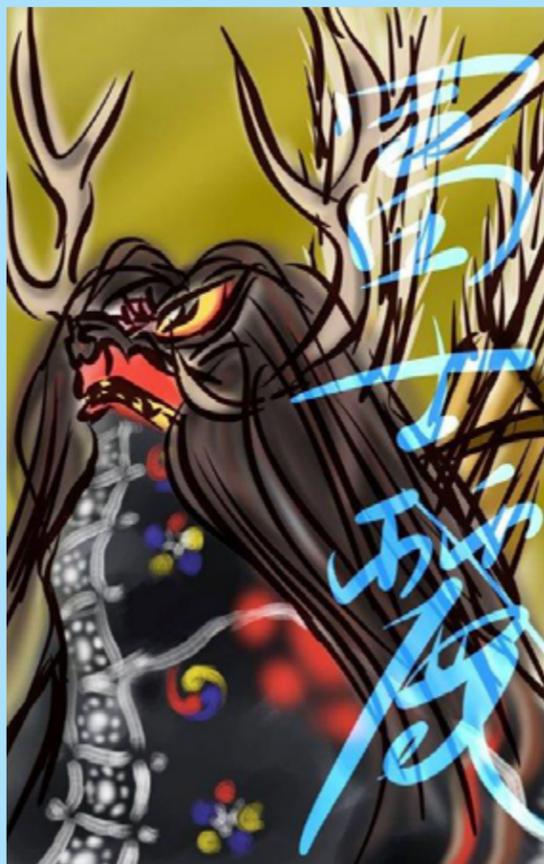
両石湾の日の出前



鹿おどりの絵



小岩井の一本桜



鹿おどりの絵木



東北地酒ラインアップ

ぜひご参加ください！
おいしい三陸海鮮を食べ、
おいしい東北の地酒を飲み
交流の輪を広げましょう
1/21 三陸酒海鮮会・渋谷

年明け第一回目の三陸酒海鮮会・渋谷開催は、一月二十一日の十六時から、渋谷ヒカリエ近くにある焚火家で開催されます。
 三陸海鮮を食べ、東北のうまい地酒を飲みながら、間接的に東北復興を支援するという「ユレイ」会ですが、ユレイからこそ、長続きするのだと思います。
 東北復興支援を声高に叫び、肩肘張った会にはしたくなかったのですが、すでに足掛け四年になります。気軽に楽しむ会ですので、どうぞお気軽にご参加ください。



毎回いろんな人が参加します



おいしい海鮮鍋



豪華な刺身



酢に浸した鮭

第29回 水産業再興のための料理レシピ紹介
【大根と鮭の挟み漬け】

普通のミツカン酢ではなく濃縮酢（5倍酢）を使って、一晩スライスした鮭を浸した方がよいようです。大根は、割り箸を上下に2膳つつセットした上にこの大根を乗せ、カスタネットのように切れ目を入れて挟むと上手いきます。（松本氏談）



大根



挟む



完成品



郷土料理愛好家
松本由美子氏

一簡単レシピ

【材 料】 フィレ半身（800g）、大根 1本、人参 50g、生姜 40g、麴 1/2、酢酸（酢で可、5倍濃縮+水）、ザラメ 100g

【作り方】 ①大根は2、3日皮を剥いて干す。干しあがったら、カスタネットのように大根に切り込みを入れ輪切りにします。2・3%の塩で一晩漬ける。②鮭の骨を取って、スライスして、酢酸水（水で薄め、自分で塩梅のよいとこで）に一晩浸したら冷蔵庫へ。③翌日、大根に鮭を一枚ずつ挟む（人参、生姜、麴も）重ね置きをしながら、ザラメを振りかける。（予め、人参、生姜、麴（温湯でふやかす）混ぜておく）（一晩漬けた大根の水も入れるとよいです）④重いしをのせて、10日ぐらいしたら、食べれます。（水の上がり具合をみる）

「逃北」のスヌメ

「逃北」という名のエッセイ

「逃北」つかれた時は北へ逃げます(能町みね子著、文春文庫)が面白かった。「逃北」というのは能町氏の造語で、「北に逃げたい衝動」のことである。「いつでも北に逃げたい。私は」という書き出しで始まるこのエッセイ、氏の「北」に対する思いが余すところなく披露されている。氏は、「私はキツイときこそ北に行きたくなるのだ。都会での生活に倦んだとき、南に行つて気楽になる」という方面に考えは進まず、北に行つてしまいたくなる」と、その「逃北」への思いを熱く語るのである。

「逃北」という言葉が「東北」と音が同じなのは偶然なのではなく、氏の東北に対する思いとリンクしている。実際、本書の中には、氏が青森や秋田や岩手に「逃」げた時の体験談が生き生きと書かれている。最初に意識的に「北」に行つた大学の卒業旅行で氏は、両親の出身地である北海道を目指すが、「途中の青森のことももすごく気に入つてしまひ」、「帰ってきてからは、北海道よりも青森のほうが印象に残つていくくらい」で、「その旅行以来、日本の『北』で私がつとも惹かれるのは、最北の北海道よりも東北地方になりました」とのことである。どんな時に「逃北」が発動するのか。氏によれば、日々東京で仕事をしていて、なんとなく心身の不調やイラつきなどが蓄積されて、「じんわりじんわりネジが巻かれて」いつの間にかある瞬間にそのネジの押さえが外れて「ぎゅるんと高速回転する」と、北に飛んでいくという。「いつも私は北を向いた砲台の中にいる」という表現がまたユニークである。

北に逃げてどうするか。「逃北」とは、「ただ単に辛い気持ちを寒い土地で倍々にふくらませる行為」なのではない。「空気が冷たく張りつめた、どこか殺伐とした場所に自分を追い込むこと」が「癒し」なのだという。

では、「北」とはどこか。氏の定義では、北海道と東北地方全体は「逃北」の対象で、関東は北らしさが弱まり、東京近郊は「北じゃない」。北陸は「逃北」の対象となりそうだが、福井までくると「だいたいもやもやしている」。長野や松本も「北」を感じるが、静岡は「ぜんぜん北じゃない」。一方、鳥取と島根には「北らしさがあるように思う」が、福岡まで来ると九州も沖縄も「まるつきり北じゃない」と線引きしている。

緯度から見るとかなり南だが、鳥取や島根にも「北」を感じるどころが、氏の感受性豊かなところであるように思う。「炎立つ」など東北を舞台にした小説を数多く手掛けている高橋克彦氏は、大陸から渡ってきたヤマト族に敗れて、遠く東北方面にまで逃れた出雲人が東北人のルーツだという「東北出雲説」を主張しているし、松本清張の小説「砂の器」では、秋田と同じ「ズーゾー弁」を話す地域が島根県にもあることが明らかにされる。私なども、この、

言葉に近いことや、うどんが優勢な西日本にあつて唯一そばが優勢な地域であることなどから、出雲周辺には親近感を覚えるのである。

多くの人が逃れてきた東北

この「逃北」という言葉実に秀逸であると思う。第38号で書いたことがあるが、元々東北は神話時代以来、様々な人が逃れてきた地である。逃れてきたというくらいだから、中央の様々な争いに敗れた結果、この東北の地までやってきたのである。そう、中央を追われた逃亡者たちは古来なぜか東北を目指すのである。

神話の時代からそうした例には事欠かず、神武天皇東征の折に殺されたときとされる長彦の兄、安日彦が津に始まり、山形の出羽三山の開祖は、父崇峻天皇を蘇我氏に弑逆されて出羽に逃れた皇子である。同じ聖徳太子の時代にはやはり蘇我氏との争いに敗れた物部氏が秋田に逃れている。平氏全盛の時代に源義経が奥州藤原氏を頼つて平泉に逃れ、その義経によって滅ぼされた平氏の平貞能が逃れてきた仙台市郊外に定義如来が、兄頼朝に追われた義経が再度平泉に逃れてきた。奥州藤原氏自体も元々関東に根を張っていたところ、関東で起こして敗れた乱の戦後処理で亘理に

逃れてきたとされる。頼朝の死後殺された梶原景時の兄影實も、気仙沼に近い唐桑に逃れてきている。元寇の折には元の残党がやはり仙台に逃れてきている。織田信長によって滅ぼされた武田勝頼の子信勝も東北に逃れたとされる。

「真田丸」でも描かれたが、主人公の真田信繁の娘や息子は伊達政宗の庇護の下、白石に逃れてきている。関ヶ原の合戦で死んだとされる石田三成や、主人公の真田幸村さえも、秋田に逃れてきたという伝承が残る。江戸幕府の禁教を逃れたキリシタンたちは東北に移り住んでいた。幕末の上野戦争で敗れた輪王寺宮も東北に逃れた。

これほど時代を問わず、争いに敗れた者が逃げ延びたという話が伝わる地域は、日本全国他に例を見ないのではありませんか。東北は古より、そのような地であつたわけである。

東北は一度も「勝つて」いない。

たくさんの方が逃れてきたと書いたが、これらの逃れた人は、単に命を長らえるために東北に逃れてきたのだらうか。もちろん、それが最重要であつたことは確かだろうが、それだけではなかつたのではないかと推測する。中央から距離があり、その支配が届きにくいこの東北の地は、中央で敗れた人たちにとって、再

出発のできる新天地だつたのではないらうか。だからこそ、皇子皇子は出羽三山を興し、藤原清衡は東北の地に浄土を造ろうとし、奥羽越前藩同盟は江戸幕府でも薩長政府でもない新しい国を造ろうとしたのではないらうか。

そして、東北が敗れた者の新天地たり得たのは、ひとえにこの地に住む人々がそうした敗れた者に対する温かい視線を持つていたことが大きい。なぜそうした視線を持ち得たかと言え、他ならぬ東北人こそが、敗れた者だつたからである。神話時代の日本武尊以来、阿倍比羅夫による蝦夷征討、坂上田村麻呂と阿弭流為の戦い、安倍氏滅んで前九年の役、清原氏が滅んだ後三年の役、奥州藤原氏が滅んだ文治五年奥州合戦、豊臣秀吉の奥州仕置と九戸正実の乱、そして戊辰戦争と、東北は攻め込んできた中央の軍に対して一度も勝利したことがない。唯一の例外は、建武の新政の折に、後醍醐天皇に反旗を翻した足利尊氏に対して北畠顕家が奥州の軍を率いて上京し、これを打ち破つたという豊島河原合戦のみである。しかし、これは中央から攻め込まれたわけではなく、中央から陸奥守として下向していた北畠顕家が上京しているわけで、「本拠地」である東北で勝利しているわけではない。

いつでも逃げてこれる地域を目指す

能町氏の「逃北」、東北の今後の方向性を考える上で大いにヒントを与えてくれると思う。これまで、観

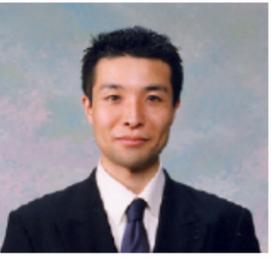
また、氏は、旅の中で観光スポットをあまりメインにしないとい書いている。観光地よりは地元土着の臭いのする街の方が好きで、「その街に観光スポットがあるとかないとか、根本的には関係ない」そうで、むしろ目立った観光スポットがない街の方に興味が湧いてしまふらしい。「わざわざ都会で作つて本にガイドしてもらおうなんて思いません。地元の情報を知りたい人が、いつでも逃げてくることのできる地域、それは必ずしも定住することを目指すのではなく、能町氏のようにネジのおさえが外れた時に何度でも来られるような、東北はそういう地域であればよいのではないらうか。

氏は「北」について、「旅先での客を『なして(どうして)』こんなところまで来たんだか」という、少し卑屈な態度で迎えてくれる。ちよつと最初だけとっかかりにくいけど、少しずつ、まさに雪が溶けるように、わざわざ来てくれたことへの感謝を前面に出して歓待してくれる。私にとって、北はこういうイメージ」と書いている。確かにそのような面は大いにあるように思う。来る人をもてなす、受け入れる、それは東北人に脈々と受け継がれている資質のようにも思う。そうでなくして東北は、神代から近世に至るまで多くの人が逃れてくるところではないらうか。

また、氏は、旅の中で観光スポットをあまりメインにしないとい書いている。観光地よりは地元土着の臭いのする街の方が好きで、「その街に観光スポットがあるとかないとか、根本的には関係ない」そうで、むしろ目立った観光スポットがない街の方に興味が湧いてしまふらしい。「わざわざ都会で作つて本にガイドしてもらおうなんて思いません。地元の情報を知りたい人が、いつでも逃げてくることのできる地域、それは必ずしも定住することを目指すのではなく、能町氏のようにネジのおさえが外れた時に何度でも来られるような、東北はそういう地域であればよいのではないらうか。

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagmas/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ootomo>

連載
むかしばなし



第四十四話
銀鱗の壁を
退けよ

鳥兎森の麓、郡山の川岸には、頼朝の工兵らが総出で伐り出し作り上げた、幾十艘もの小舟が並ぶ。しかし深まる闇の中、漕ぎ出すべき川面は消えてその太い流れの跡には月夜に白銀の輝きを閃かす、巨大な龍が横たわっているのだ。この怪物は・・・大天狗めによる幻。さよう現実のはずがない。背後に狂った青猪どもが迫っている・・・越える他はなし!

川には一滴の水も残っていない。小舟を置いた兵どもは雄叫びを上げながら、龍の横腹めがけて一斉に押



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

し寄せる。兵の上に兵が昇りその上にまた兵が昇って瞬間に十尺はあろうかという龍の背まで迫る。

しかしその龍のような皮膚が微かに震え、波打った・・・かと思つた次の瞬間、怪物は全身で暴れ始めた。兵ら数百人がばらばらに跳ね飛ばされ、空中に舞う。

「回避! 回避いいい!」

龍にしてみると、少し寝返りを打つただけなのかも知れないが、凄まじい砂埃や飛び散る樹の枝が頼朝たちに降りかかる。

「弓隊、矢を番えよ! 化け物に狙いを定めい!」

手を越える長弓隊の放つ矢が夜空を横殴りの雨のように飛ぶ。鎧のような鱗は伊達ではなく、大半の鱗は跳ね返されてしまった。

「幻などではない・・・実体だ。こんなものをどうしたら討ち果たせようか!」

頼朝は叫び出しそうになるのをぐっと堪えて、周辺を固める重臣らに「いかにしてあれを退けるか」と質すが、誰もが返答に窮している。これはダメだ・・・いよいよ打つ手なしか。背後からは猛牛の群れが押し寄せ、兵らの阿鼻叫喚が轟く。大天狗め! 相対する事も叶

わぬというのか。我が兄・雷神悪源太は何処に? その時だった。

の群れがほれ!そこに」

家臣団が頼朝もろともうろたえたが又太郎は高笑いして手を振った。

「心配御無用! 我が僕・護法草駄丸が大牛返しはお引き受け賜った・・・」

振り返って一同、驚愕した。状況は一転、宙に放り上げられるのが巨大なカモシカの方になっていたので

「報告! 青鹿の群れが何者か怖ろしく脚の早い者に投げられております。極めて強い力士か何かです!」

「護法・草駄丸、丸?」

鎌倉の武者どもは呆然としている。頼朝はそれでも傲然と言いつつ放つた。

「貴様の助けなど不要だぞ、又太郎忠綱よ。この頼朝、東国最強の神を味方に付けて参つた故な。」

「あいや、それは兄君・悪源太義平さまでは・・・真に申し開きもござらぬが、拙僧ら日中に愛島にて悪源太さまと相撲を取らせ給いて土をば付けさせ奉り? もうよくわからん・・・」

「な、何だと!」

「征し奉つたというのか・・・雷神さまを!」

「故に、悪源太様に成り代わり、拙僧が妖怪どもを調伏しこれより北の道を開いてご覧に入れますよう。」

一体、どういう事だ・・・日和見の若侍が雷神である兄を討ち果たし、尚も大天狗を向こうに回すなど家語するとは。

「結構だ。海道軍を率いる千葉の親父殿が強力な使者

を遣わすと言つてきた。知つているだろうが、千葉は平将門公の意を継ぐ一族・貴様ら秀郷流とは最も相容れぬ存在であろうが。」

千葉常胤・古代、将門とともに坂東独立の為戦つた平良文の末裔。彼の後ろ盾あつて初めて自分は坂東武者勢の上に立ち今ここに在る・・・頼朝はよく承知していた。

「あいや、その使者とは、まさに拙僧の事なり。」

頼朝は仰け反る。

「千葉介殿は逢隈川河口付近より、北岸へ渡る手筈でござるが、あちらは何しろ相馬との地縁あり、特に抵抗には遭いますまい・・・そこで拙僧に、もし大手軍の鎌倉殿苦戦の折は助太刀申し上げよ、と遣わされました次第。」

脱力した身体を家臣らに支えられる頼朝に、尚も又太郎は言い放つ。

「拙僧、己が国を失つた者せめて、この河向こう、国分が原なる土地だけでも頂戴できますか。」

上総介義兼が返す。

「大天狗の統べる物の怪の地ぞ。呪われたのか?」

「我は端くれの若輩ながら高野山の密教僧也。至極望むところござる。」

もはや何者も止める理由はなく、藤胤と号した若僧は横たわる怪物の元へ大股に歩み寄っていく。

「おう、おう、広瀬の龍よ」

「拙僧、藤胤は伊達小次郎泰衡殿の遠縁にして旧き

友、この度、戦の仲裁役を受け賜つた次第であるぞ」

龍は横腹の鱗を震わせじやらじやらと鳴らした。

又太郎は、ちらりと左の空の方向を見た。そちらに龍の頭があつて、あの鎧を着けた奇妙な巫女が向かい、怪物と話をつける、と言つていたのだが・・・果たして

一方、大河次郎兼任は対する広瀬川の北岸にいた。

休戦が決まつた後、河田次郎守継が「泉様が、作戦を講じたいと仰せだ。」と

いうので、密かに川を渡つたのである・・・尤も、河田の術で渡る道には水がなかつたし、渡り終え振り向くと、そこには既に見事な白銀の龍が横たわっていた。

泉三郎忠衡は腕を組み、相変わらず超然とした佇まいで南の方角を睨んでいる。

「大河次郎ではないか・・・身体が戻つたのだな。かと思えば休む間も持たず・・・ご苦労な事である。」

「泉さま・まだこのような所に? これは某ども蛮兵にお任せあれ。」

「敵が退くと思うか。」

「では、ここが死に場所と定めたのだろうか、見当違いというものだな。」

「と、申されますと」

「其方は出羽で軍勢を集めて体制を立て直せ。ここは我ら天狗一家に一任せよ」

「しかし、泉さまは既に」

「さよう、自分は兄・泰衡の画策で、義経殿に与した

為に誅殺されたという事になつているから、正体を知られる事は罷りならん・・・そこでだ。」

忠衡は天狗の目と歯を閃かせ、笑つた。

「大河兼任の名、借り受け申すぞ。一日だけな」

「ここだ・・・光原社。こんな名前を、俺以外の人間がつけるだろうか?」

遠い未来の奥州の廃墟都市、仙臺にその建物は確かに存在していた。賢治はほとんど蔓植物に覆われた二階建てだったらしい残骸に両手で抱くように触れる。

喜善もまた蔦の葉を摘み撫でながら考えている。

「偶然かな・・・奥州街道、つまり国分町通南側に位置しているが、何か意図的な配置なのだろうか。」

建物の中からは樺が生えて内側から建材を押し、巨樹に成らんと門から窓から四方に枝を伸ばしている。

「放射線値とやらが低いとはいえ・・・ここもやはり長らく無人のようだな。」

トヨハは左腕に巻いた計測器を凝視しながら、国分町通をはずれて西へ、東へとてくてく移動していく。

「この真つ直ぐな通り・・・ここが一番値が低い。この道を外れると急に高くなる」

女操縦士は脇腹に下げた手鏡のような機器を掲げる。その表面は磨いた黒曜石のよう、どうい仕掛けか仙臺のものらしき地図が浮

かび上がつてくるのだった。賢治が飛びついて、言う。「ちよ、ちよといいかい! これか今いる、奥州街道」

「そう上手くいくかしら」

喜善は「光原社」の中に踏み込み、樺の幹に触れる。「さて・・・どうしたら元の世界へ戻れるか。」

「あれ・・・喜善さん。」

不思議に思つて、賢治は声をかけ近づいた。

「背が縮んでいない?」

トヨハの言う通り、六尺もあるはずの喜善の背丈が、今や賢治の肩辺りまでしかないように見えた。

「始まつたか!」

叫ぶが早いか、賢治も『光原社』に飛び込み、同じように巨樹に触れる。

「待つて! 宮澤さん、これを持って行って」

状況を感じたトヨハが腿の大きなポケットから硝子の筒のような物を出し、賢治に渡した。そこには、黄色に輝く稲でも麦でもない、穀類らしきもの穂が透けて見えるのだった。

「貴方は結局、これを使う事はしないだろうけど・・・」

少しずつ、樺の樹や廃墟の建物、そしてトヨハが巨大化していく。だがそれは錯覚で、二人は遂に元の世界へ向けて縮小を始めていたのだった。

「さあ、僕が石に最後に混ぜた成分の作用だろうか」

黒曜石、水晶、電気石、そして瑠璃・賢治はその石たちに様々な要素を合成したのが、最後の成分とは何だったのだろうか。

「ともあれ、全部のサイドの人々をここへ降ろして、ここからまた・・・始める事ができるんじゃないのか!」

「次回予告」

遂に取り扱われるか最後の壁! 「小天狗」忠衡と「暴僧」忠綱の勝敗や如何に。そして賢治たち、こんな所に帰ってきて大丈夫か!?

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

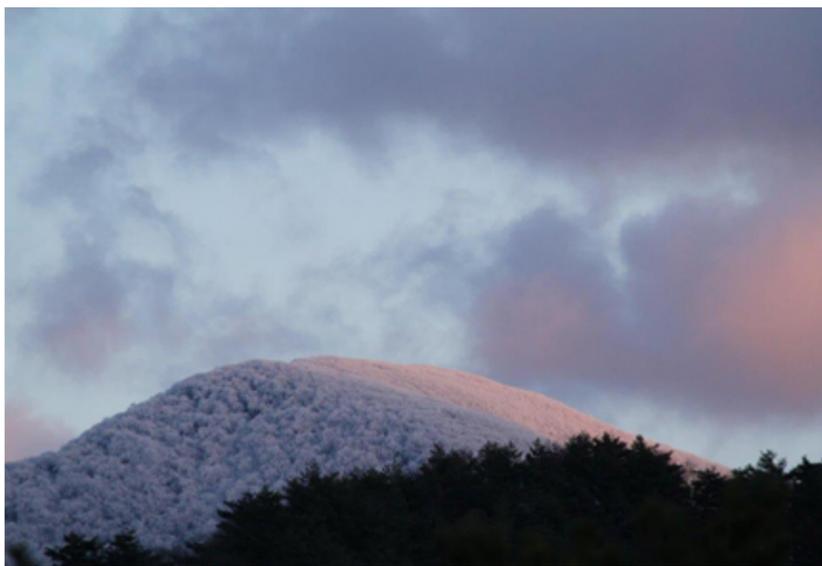
シリーズ 遠野の自然
「遠野の小寒」
遠野 1000 景より

昨年後半から、世界的にさまざまなニュースが乱れ飛び、とても落ち着かない年末年始となりました。そこに加え、新年を迎えたら急に寒くなりました。

身体も心も本格的な冬を迎える準備が必要なのです。そこで今回は小寒の遠野の風景をお届けします。氷の中に閉じ込められたナンテンやつらが遠野の寒さを伝えてきます。六角牛

山頂に積もった雪も同様ですが、夕日に映えてとてもきれいです。有名な南部曲り家にもうっすら雪が積もっています。ハクチョウの飛来も冬ならではです。

また、仙人池にも氷が張り始めたようです。冬枯れたヤマユリに積もったふんわり雪が本物の綿のように柔らかそうです。最後に、ウバユリはまるで他の星の生物のようです。



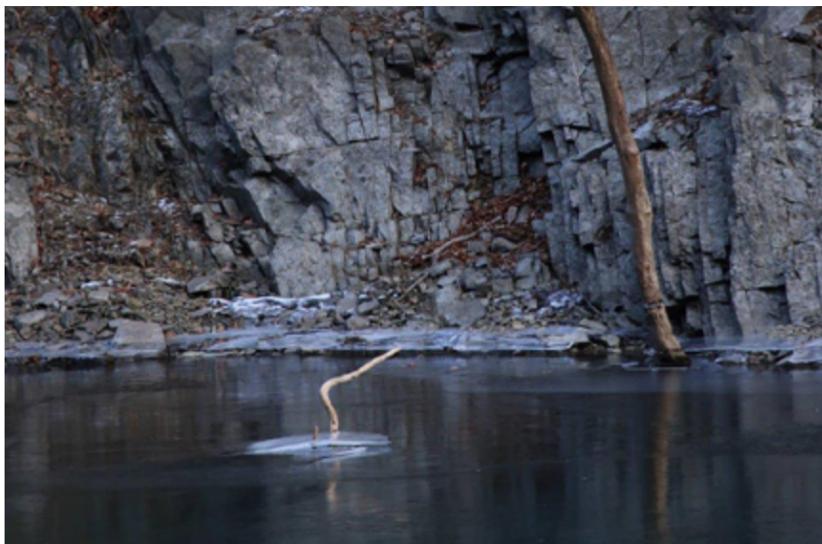
夕日と六角牛山頂上



冬のナンテン



初冬の曲家



仙人池



ハクチョウ



冬のウバユリ



ヤマユリに雪



つらら



『復興を目指して！頑張ろう石巻』という垂れ幕

**写真でたどる被災地のあの時
（宮城県石巻市）**
当新聞第2号 2012.7.16 発行



道路上の赤い船



支援物資配給の列



何もかも流された海辺

**写真でたどる被災地のあの時
（岩手県大槌町 / 山田町）**
当新聞第5号 2012.10.16 発行



大槌—ガレキの山



破壊されたままの大槌町役場



山田—巨大なガレキ撤去機械



山田—折れ曲がった岸壁の街灯



津波が去った直後の石巻市十三浜・大室

**写真でたどる被災地のあの時
(宮城県沿岸部)**
当新聞第6号 2012.11.16 発行



小網倉浜 無残に破壊されたままの港



鮎川 打ち捨てられたホエールランド



打ち上げられたコンテナ

**写真でたどる被災地のあの時
(福島県相馬地区)**
当新聞第15号 2013.8.16 発行



小高のまちはゴースタウン



ここから先は許可証必要ー福島第一原発数キロ地点



放置された家



小高地区の有名なお菓子屋さんの垂れ幕